

# 郷音

No. 86

〒590-0959

日本キリスト教団 堺川尻教会

堺市堺区大町西三丁一、十三

☎〇七二・三三三・三三三

「イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。」

(ルカ福音書五章一二節)

讃美歌「心を高くあげよう」は歌います。「心を高くあげよう／主のみ声にしたがい／ただ主のみを見あげて／心を高くあげよう。」心を高く主なる神にあげて神と向き合うことは、私たち人間が、与えられた命を生きる上でとても大切なことです。

しかし私たちは、心を高くあげられないときがあります。心が深く沈み込み、落ち込んで、神に向かって心を高くあげられなくなってしまうことがあります。

冒頭の聖句の人もそうでした。

この人は全身重い皮膚病にかかっていました。その肉体の痛み、苦しみはどれほどのものだったでしょう。まずそれだけでも、この人は心を高くあげることが難し

かったと思われれます。

しかもこの人の苦しみはそれだけではありませんでした。当時重い皮膚病は、いわゆる業病とされ、この病の人は特別な呪いを受けていると誤解され、人々から差別されたのです。町に住むことを許されず、町の外で一人か同じ病の者

## 心を高くあげよう

ルカによる福音書五章一二〜一六節

塚本一正牧師



たちと住み、健康な人たちとの接触を許されませんでした。

本当に残酷なことです。この病にかかった人は、肉体の苦しみに加えて、皆から差別され人として扱われない心の苦しみを負わなければならなかったのです。そのような人が、心を高く神にあげることができたでしょうか。できなかったのではないのでしょうか。むしろ、自分は神から見捨てられたと思わざるを得なかったのでは

ないでしょうか。どん底の孤独と絶望の中で、うずくまるしかなかったのではないのでしょうか。

しかし今、この人のところに、神の子イエス・キリストが来られたのです。どん底の孤独と絶望の中で、自分の力では神に心を高くあげることができなかったこの人のところに、神の子の方が来てくださったのです。神にとつてはこの人も、失われてはならない大切な存在だったということなのです。神

のもとから迷い出た一匹の羊を、捜し出し取り戻すために、今まことの羊飼いのイエス・キリストが来られたのです。

この人は主イエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願います。主は手を差し伸べてこの人に触れられます。これまで誰も近づこうとしなかったこの人に、主は手を差し伸べてその体に触れてくださるのです。そして「よ

ろしい。清くなれ」と言われて、病を去らせてくださるのです。

こうしてこの人の病は治りました。しかし人が本当の意味で癒され救われるのは、神に心を高くあげて神と向き合うときです。ですから、主はこの人に命じられます。「神殿に行つて祭司に体を見せ、清めの献げものをして神を礼拝するように」と。主はこの人に、神を礼拝して神に心を高くあげることとを命じられるのです。

私たちの国でまた起こった痛ましい事件。通学途中の小学生と保護者を襲って殺傷し、自らも命を絶つた犯人は、深い孤独と絶望の中にあつた人だったことがわかっていきます。もしも彼が、救い主イエス・キリストと出会い、神に向かって心を高くあげることができていたら、きっとあのような事件は起こさなかつたに違いありません。私たちの国には、救い主キリストによつて神に心を高くあげて癒され救われることを必要としている人が多くいます。主から教会に託されている伝道の使命を、改めて心に刻みたいのです。